

2-4 レベル4の自動運転

レベル4の自動運転の例としては、つぎのようなものがあります。

- 【例5】 どのような場面に遭遇しても安全の確保ができることを保証するため、場所を高速道路や自動車専用道に限定し、自律検知機能や車車間通信／路車間通信機能のほかに交通管制的な機能も導入して、車両を制御する。

このような形態は、表面的にはドライバーに何も要請していないように思えます。しかし、レベル4の自動運転の基盤技術やシステム構成要素に一時的あるいは永続的な不具合が発生したとき、ドライバーはどのように対処することになるかを考えてみると、システムに対する知識が皆無の人や運転免許証をもたない人は、レベル4の自動運転を利用しないほうが無難であるということになります。レベル4の自動運転機能が失われたときでも、レベル3以下の自動運転機能なら利用できる場合があり得るとすると、それらのレベルの自動運転に移行した場合は、ドライバーに一定の知識や技量を求めることになるからです。

また、レベル4の自動運転は誰にとって有用かを考えてみると、別の問題が浮かび上がってきます。レベル4の自動運転を欲している潜在的ユーザとして、公共交通機関が利用できない過疎地に住む高齢ドライバーが考えられます。日常の買い物や通院に車は欠かせません。しかし、高齢になってくると、自分で運転するのは疲れます。「行き先を示せば、そこまで連れて行ってくれる自動運転システムがあれば、これほどありがたいことはない」と考えても不思議ではないでしょう。そのような状況は、例5に示したケースとは明らかに異なります。過疎地での生活に便利のように高速道路や自動車専用道が整備されることは考えにくいからです。そうすると、ニーズとシーズの不整合が起こることになります。ニーズとシーズを一致させようとする、(十分に整備されたとはいえないかもしれない)一般道を自動走行できるようにする技術が必要になりますが、これは、メーカーにとって大きな負担であり、挑戦であるといえましょう。